●エッセイ

南の国の鳥を待つ

佐藤嗣麻子

「凄い！　凄すぎるぅ！」
『半神』を読んだとき、私は叫んだ。ベッドの上でごろごろとのたうちまわった。一九八四年一月号の「プチフラワー」。私が19歳の時。
「16ページでこれほど人を感動させるなんて！」
16ページというのは、当時の少女まんがの新人公募で描かせられる基本の枚数だった。ストーリーまんがの最小単位。
「16ページでこれほどの作品が描けるなんて!!　やっぱり萩尾望都は本当の天才なのよ！」
　萩尾さんのまんがを最初に読んだのは『ポーの一族』だった。小学校低学年の時で、当時、小遣いを貰ってなかった私は、まんがが買えず、長期休暇中に親戚の家で「少女コミック」を読んでいた。最初に読んだのが、どのエピソードだったかは覚えていない。『ポーの一族』か『ポーの村』だったような気がする。エドガーの目の印象が強烈で、目が大きくて怖いまんが。と、思った事だけを覚えている。

　その後、どこでどう、萩尾さんのまんがにはまっていったのかは良く覚えていない。思いだそうと努力をしたが、記憶力が全然無いので、さっぱりダメだ。『11人いる！』の頃にはずっぽりはまっていたと思う。一九七七年に放送されたNHKの『11人いる！』に愕然としたのを覚えているから。その頃にはもう、『ケーキ ケーキ ケーキ』『あそび玉』や『小夜の縫うゆかた』も読んでいた。
『小鳥の巣』に出てきた薔薇のエッセンス作りに挑戦した事もある。庭に咲いている薔薇の花びらを拾ってきて、小さなミルクパンでぐつぐつと煮た。（薔薇を大切に育てていた祖母に悪くて、とてもつぼみは取って来れなかった。）――数分で薔薇の花びらは茶色の生臭い液体に変わった。薔薇の香は全然無い。『――どこか遠い谷間でね――沢山の赤いばらを咲かせながら――つぼみをつんでは永い永い日び炉ばたの火をくわえ……やがて、つうんと香が立ち、そのうわずみがすきとおるまで……』確かにまんがにはそう書いてあった。「このまま何日も煮なきゃいけないのかしら？」数時間で挫折した。それでも、一応、茶色の液体を、星砂の入っていた小瓶に移した。小瓶に移しても全く薔薇の香はしなかった。茶色い液体の中に花びらの残りのおりが残って気持ち悪い物になっていた。「バンパネラが飲んでいたのはこんな物ではないはずだ。」数日で液体の表面にカビが生えた。
　小学校6年生の時に、宇宙飛行士とまんが家になる夢をあきらめ、美術の専門学生の時

にイラストレーターになることをあきらめた。英語と映画の勉強をするために、22歳の時にイギリスに渡った。

『ポーの一族』のロンドン。ピカデリーサーカス、地下鉄、公園――萩尾さんの描くロンドンは実際のロンドンよりは、パリに雰囲気が似ている。

ロンドンの映画学校の最終学期で、ようやく監督できる機会に恵まれた。何の迷いもなく『半神』をやろうと決心した。「萩尾さんの作った素晴らしい作品の感動を借りよう。」と。緊張しながら萩尾さんに手紙を書いた。字が下手なので何度も書き直した。「卒業制作です。商業作品では無いので是非『半神』を作らせて下さい。」

その年は不思議なことに夢の遊眠社が『半神』を上演し、デイビット・クローネンバーグが『戦慄の絆』を発表した。

手紙を出して数週間後に萩尾さん自身から葉書が来た。「是非、作って下さい。」

撮影5日。予算一二〇万。16ミリ。カラー。11分の『SUZY&LUCY』は、その手紙から6ケ月後に完成した。評判が良く、各国の映画祭に招待された。『半神』の持つ力を少し借りることができたようだ。

『半神』のお陰で私は映画監督になり、萩尾さん自身にもお会いする事ができた。この作品が無かったら、私はまだ映画監督になっていなかったかもしれない。

私は、萩尾さんの作品から、話の作り方を教わった。ある時、何かの本で、萩尾さんがストーリーの作り方について話をしているのを読んだのがきっかけだった。「16ページなら4つに割って起承転結に4ページずつに割り振る。あとは話の展開で結を1ページにしたり……」というような内容だった。私の記憶違いで、他の人が話したことなのかもしれない。でも、私の中では萩尾さんになっている。

それから、私はまんがのページとコマの数を数えはじめた。何ページ目に起承転結が来るのか？ 一ページに平均、何コマ入っているのか？ キャラクターはいつ登場する？

この方法は、映画という分野でも役立っている。映画の中で何分目にどんな出来事が起こるのか、脚本の何ページ目に何が起きるのかを分析したり、考えたりする作業はとても楽しい。

萩尾さんのスケッチブックが本に載ると、絵の横に書かれてある小さな文字を、一生懸命読んだ。『スター・レッド』か『銀の三角』の最初の段階のメモを見たときには、本当に勉強になった。今でも、萩尾さんのスケッチブックを覗いてみたいと思っている。きっと、そのスケッチブックの中に天才の秘密が隠されているに違いないのだから。

「萩尾さんって、自分が天才だという自覚があるのかしら？」 ある日、萩尾さんのマネージャーの城さんにこっそりと尋ねてみた。「ぜ～～んぜん！」

城さんは笑いながら答えた。
「萩尾さん、萩尾さんがお話を作るときって、『木に鳥がとまるのを待っているの』っておっしゃったって、聞いたんですけど、本当ですか？」
私はタクシーの中で萩尾さんに尋ねた。「そうねぇ、どうせとまるなら南の国の鳥のように綺麗なのがいいわねぇ」萩尾さんは、夢見るようにそう答えた。――それ以来、私の木にも、いつの日か南の国の鳥がとまってくれる事を願い続けている。

佐藤嗣麻子　一九六四年生まれ。映画監督。ロンドン・インターナショナル・フィルム・スクール卒業。九二年『ヴァージニア』で東京ファンタスティック映画祭アボリアッツ賞、九五年『エコエコアザラク』で南俊子賞を受賞。最新作に『エコエコアザラクII』などがある。

小学館文庫

半神

1996年9月10日初版第1刷発行（検印廃止）
2008年11月20日　　第22刷発行

著者 ―――― 萩尾望都
©Moto Hagio　1996

発行者 ―――― 横田 清
印刷所 ―――― 図書印刷株式会社
発行所 ―――― 株式会社　小学館
101-8001　東京都千代田区一ツ橋 2-3-1
TEL　販売 03-5281-3556
　　　編集 03-3230-5456

編集人 ―― 毛利和夫　　編集協力 ―― 小学館クリエイティブ

ISBN 4-09-191017-3